

臨床心理士が見たカンボジア

篠田 瑛子

1. はじめに カンボジアについて

1) カンボジアの概要

本論文では筆者が一人の臨床心理士としてカンボジアという国を訪れ、そこで経験したことを通じ、感じたことを報告する。そしてその作業ののちに、今後の臨床心理学の立場におけるカンボジアとの関わりについての私見を述べることを目的とする。

カンボジアは、正式な国名をカンボジア王国といい、西にタイ王国、東にベトナム社会主義共和国、北にラオス人民民主主義共和国と3国に国境を接している。首都はプノンペンで、国土のほぼ中央に位置している。人口は、在日カンボジア大使館の公開している情報によると2008年の段階で約1338万人である。そのうちの90%をクメール人が占めており、また90%の国民が仏教を信仰している。政治制度は、現在、立憲君主制を採用している。なお、1941年に即位し、後述する独立や内戦など現在のカンボジアを形作る激動の時代に国王として多くの功績を残したノロドム・シアヌークが、2012年10月に心不全で死去している。現在は、その息子であるノロドム・シハモニが後を継いでいる。議会は両院制を採用し、議員は直接選挙で国民により選ばれている。またカンボジア憲法を含む多くの法の整備は日本が全面的に協力して行っており、カンボジア憲法には永世中立が明記されている。GDP（国民総生産）は2009年で103億アメリカドルであり、決して裕福な国ではない。主要産業は、農業など第一次産業である。

2) カンボジアの歴史

続いて、第二次世界大戦後のカンボジアの歴史について簡単に述べていく。

1945年当時、カンボジアはフランスの植民地であった。国王シアヌークは何度も独立を求めて活動し、1953年には各国の承認を得て独立することに成功した。しかし1960年代に入ると、隣国のベトナムで戦争が激化し、その影響がカンボジア国内でも見られるようになってきた。とくに深刻だったのが、北ベトナムによる余剰米の買い上げとそれに伴う国内の経済的混乱である。そして1970年、反ベトナムを掲げるカンボジア軍の将軍ロン・ノルがクーデターを起こし、政権を奪取。これにより、カンボジアはベトナムと対立するようになる。空爆はカンボジア全土におよび、さらに国内は混乱に陥った。

ロン・ノル政権はアメリカの支援を受けていたが、1973年にアメリカがベトナムより撤退することで後ろ盾を失った。また、そのころには農村部の食糧難は深刻になっており、貧富の差はより激しいものとなっていた。そんな中、登場したのが共産主義を掲げるポル・ポトを中心としたクメール・ルージュであった。

1975年にロン・ノル政権が完全に崩壊すると、極左武装組織クメール・ルージュがプノンベンを占拠。政権をとるようになった。当時、国民はアメリカをはじめとする資本主義がもたらした国内の混乱に疲弊しており、クメール・ルージュは歓迎されたという。

クメール・ルージュは極端な共産主義を掲げていた。その政策は国民全体の農村回帰から始まった。都市部に住む人たちは農村部へ強制移住させられ、また知識人たちは次々に処刑されていった。当初はうまくいくかに見えたが、飢饉などが重なり、多くの死者を出すにいたった。また、反乱分子を粛清していくうちに政権内でも疑心暗鬼になっていき、少年兵を多く使うようになっていった。

そのような極端な政治が行われていたのは約4年半であるが、その間に170万人が犠牲となった。その数は当時の国民の約20%に相当する (Yale University, 2005)。

クメール・ルージュの中心であるポル・ポトは毛沢東主義を信奉しており、中国との関係が深かった。一方、ベトナムはソビエト連邦の支援を受けていた。当時、中国とソビエト連邦の対立は激しく、その影響もあり、カンボジアとベトナムは再び戦争状態に陥った。しかしカンボジア国内は干ばつや粛清で国力が低下しており、結局ベトナムが反クメール・ルージュ勢力を支援することによって、1979年にはクメール・ルージュ政権を打破するに至った。

その後、ポル・ポトは西部の一領域を保持し抵抗を続けたが、腹心を殺害したことで逮捕され、自宅監禁ののち、1998年、自宅で病死した。

そして現在も、クメール・ルージュの幹部に対する国際法廷は行われている。

3) カンボジアの現在

ベトナム戦争やクメール・ルージュの大量虐殺を経た現在のカンボジアは、未だに多くの問題を含んでいる。1つ目は知識層の不足である。先述したとおり、クメール・ルージュは当時の知識層の多くを粛清した。その結果、現在でも知識層の不足は続いている。それによってもたらされているのが、2つ目の経済的不安定である。そして3つ目に貧富の差が激しいことがあげられる。多くの孤児が生まれ、ストリートチルドレンが問題となっている。彼らは教育を受ける機会を持たず、よって仕事を得ることもできない。しかし一方で富裕層は、豪華な邸宅に住んでいる。地方には電気がないところもある。それが現在のカンボジアの姿なのである。

2. 筆者とカンボジア

1) カンボジアとの出会い——映画「キリング・フィールド」

「キリング・フィールド」(*The Killing Fields*)は、1984年制作の英国映画である。ニューヨーク・タイムズ記者としてカンボジア内戦を取材し、後にピューリッツァー賞を受賞したシドニー・シャンバーグ (Sydney Schanberg) の体験に基づく実話を映画化したものである。作中は当時のカンボジアの政治状況についての詳しい説明はなく、初めてVHSで観たときには何が起きているのか分からなかった。ただ、今振り返って思うと、様々な政治背景を知らずに観た当時の不安や混乱は、基となったシャンバーグを含む、当時の人々の感覚に近いものであったのかもしれない。いったい、この状況はどうなっていくのだろうか。人々はそう感じながら過ごしていたように思う。

この映画の中で筆者は、あるシーンに衝撃を受けた。まだ思春期を迎える前に見える少女が、自動小銃を構えて大人の男性を威嚇し、強制的に労働させていたのである。強制労働のシーンはほとんど台詞がなく、あってもクメール語であり、字幕が表示されなかった。言葉の説明がなく、淡々と管理されて農作業をする大人たちとそれを監視する少年・少女たち。最後に準主役であるカンボジア人通訳が脱走した先には、美しい自然の中に打ち捨てられた大量の白骨化した死体の山。説明もなく、予備知識もない筆者は、ラストシーンを観てもまったく安堵することができなかった。自分が知らない世界があることがとても不安であった。

2) 中野弘治先生との出会い

愛知学院大学心理臨床センター主催の公開シンポジウムで、東南アジアにおける国際支援が取り上げられることになった。そこで筆者はカンボジアで国際支援を行っている、NPO法人こころとからだの発達サポートシステム代表である中野弘治先生の報告を聞くことができた。

支援の内容は臨床動作法が中心であったが、その他にもカンボジアの多くの問題を抱えた現状を知ることができた。その報告を聞きながら、実際に見てみたいという気持ちを覚えた。その国でいったい何が起きているのか、どんな問題があって、どんなことができるのかを自分の目で見てみたいと思った。

その場で中野先生と話をさせていただき、日を改めてもう一度活動内容をうかがった後、半年後の心理リハビリテーションキャンプに同行させていただくことになった。

3. カンボジア訪問

筆者がカンボジアを訪問したのは、平成23年3月24日から29日の5日間であった。

1) キリング・フィールド

クメール・ルージュが大量虐殺を行った場所の俗称。プノンペンから12キロほど南西に行ったチェン・エク村にあり、現在は一般に公開されている。トゥールスレインにあった強制収容所で拷問を受けた政治犯たちが連れてこられて、殺された場所で、正確な犠牲者の数は今なお不明である。

敷地内に入り、まず最初に目に飛び込んでくるのが大きな慰霊塔である（写真1）。白いコンクリート製の塔の中は頭蓋骨が無数に置かれていた（写真2）。説明書きを見ると、どれも20代の若者のものであるという。また、発掘時に見つかった犠牲者の衣服も積み上げられていた（写真3）。どれもただの布切れのようにしか見えず、そのことが逆に生々しく感じられた。敷地内はその慰霊塔と展示室を除けばただの公園のようにも見えた。しかし、ところどころに掘られた穴は、死んだ犠牲者を投げ込んだものであるとのことだった。

2) トゥールスレイン博物館

もともと高校の校舎であったとのことだったが、つくりは本当に日本の建物とさして変わりがなかった。建物を包むように有刺鉄線や金網が張られているのが、大きな違いだった（写真4）。

第一棟は取調室が並んでいた。教室であった部屋にはひとつずつ鉄製のベッドが置かれていた（写真5）。部屋の大きさの割にはぼつんと置かれているといった印象だった。その上で死んでいった犠牲者の写真が、一つひとつ展示されていた。写真が不鮮明なせいもあるだろうが、それは死体の写真というよりも黒い人型の塊のようにも見えた。第二棟は展示室になっていた。部屋に入ったとたん、無数の人の顔写真が並んでいた（写真6）。パネルに隙間なく並

臨床心理士が見たカンボジア



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真7

べられたのはすべてこの強制収容所に連れてこられた犠牲者たちの入所時の写真だった。みな正面を向き、ほとんどが無表情である。この写真の人たちはわずか7人を残して死んでしまい、今はもういないのだという事実が一方で生々しく、一方で現実味のない、表現しがたいものとして感じられた。第三棟は部屋をレンガや木とコンクリートで1畳ほどに仕切った個別の収容スペースになっていた。作りは本当に雑で、急ごしらえで作ったのだということがありありと感じられた。ここでドアの上に“PRAY NOT PREY”と書かれているのを見つけた（写真7）。観光客が落書きしたものだった。筆者はそれをした人の気持ちになんとなく分かったような気がした。あとで聞いた話だが、すべてを見学する前に気分が悪くなってしまう人があるとのことだった。それもありえるぐらい、感情を揺さぶる場所であった。

3) プノンペン市内

最終日、筆者はひとりトゥクトゥクをチャーターして、プノンペン市内の国際協力のもとに運営されている店舗を回ることにした。それは予定には含まれていないことであったが、現地では発行されている情報誌を読んでいるうちにたくさんのそうした店があることを知り、どうしても自分で見てみたいという思いが強くなっていった。そこで中野先生と相談し、半日だけという約束で単独行動をすることになった。トゥクトゥクの運転手は筆者と同一年の若者で、と

でも誠実に仕事をしてくれた。

① FRiENDS

1994年設立のカンボジアの現地 NGO。ストリートチルドレンたちに教育や職業訓練などを行っていた。施設にはレストランやショップが併設されていた。レストランでは元ストリートチルドレンだという若者が給仕を行っていた。それを指導するのにも、この FRiENDS で訓練を受けたスタッフだということだった。ショップでは子どもたちの手作りの品が並べられていた。多くが廃材をリサイクルした商品で、タイヤを再利用したバッグや使い古しのカラトリーを使ったアクセサリーなどが並んでいた。また一角はネイルサロンになっており、日本の約10分の1の値段でマニキュアなどのサービスが受けられるようだった。

② KURATA PEPPER

1970年代の内戦でほとんど失われてしまったカンボジア胡椒の伝統的な農法を復活させた KURATA PEPPER は、日本人のカンボジア支援の中でも、この店は絶対に訪れてみたかった。その日はたまたまオーナーである倉田浩伸氏がカンボジアに来ており、20分ほど話をすることもできた。

③ Daughters of Cambodia

NGO が運営しているショップ。性被害を受けた女性に職業技能訓練を行い、実際に作ったものを販売したり、店員として雇用したりしている。店内には女性らしい商品が置かれ、訓練の様子をパネル展示で見ることがもできた。店員の話では、カンボジアの女性が高等教育を受けることは今でも難しく、また貧困層では人身売買も行われているとのことだった。そのような境遇から抜け出して自立することは非常に困難で、何かの技術を身につけることが生きていくためには必要とのことだった。

④カンボジア日本友好技術訓練センター

日本の海外青年協力隊が技術支援を行った後、カンボジアの人々だけで運営されるようになった。おもに印刷業と縫製技術の指導が行われている。現在は縫製技術の訓練校とそこで作られた製品を販売する「クロマー・クロスショップ」がある。そこで筆者はカンボジア在住の元海外青年協力隊だったという日本人男性と出会った。彼もまた、いつまでも日本が支援しているのではなく、カンボジアが自立することの必要性を話してくれた。

4. 心理リハビリテーション同行

① NPO 法人こころとからだのサポートシステムの活動

NPO 法人こころとからだのサポートシステム（以下、ここ・からサポート）は2006年より

カンボジアの子どもたちへの支援を開始した。主な活動は①National Body for Infant and Children (NBIC) で生活する肢体不自由児や知的障害児に対する心理リハビリテーションの実施、②現地スタッフへの技術指導とフォローアップ、③情報発信、④国際交流である。

②心理リハビリテーションキャンプ

筆者が参加したキャンプには4人の日本人臨床動作士と3人の現地スタッフ（うち1人はNBICのスタッフ）、それにカメラマン兼手伝いとして筆者を含めた2人の日本人がいた。各現地スタッフには一人ずつ日本人の臨床動作士が付き、指導を行った（写真8,9）。キャンプは3日間、午前中のみだけ行われた。筆者が参加したのはそのうちの2日間であった。

臨床動作法は日本人の心理臨床家成瀬悟策によって提唱された一つの心理療法および心理学理論である。元々は脳性マヒの子どもに対する訓練の一つとして考案され、その当時の呼称が心理リハビリテーションである。現在は広く多くの疾患や症状、さらには身体機能を高めるために応用されている。

筆者自身は臨床動作法を現場で使用したことはなく、ただ知識のみがあるだけであったので、当初は簡単な通訳に徹していた。

2日目に、中野先生が一人の少年を紹介してくれた。14歳になるというその少年は身長が1m弱で、いつも四肢を折り曲げて固まっていた。筋肉が緊張しているのは、目に見えて明らかだった。どう見ても3歳くらいにしか見えなかった。その子どもは常に傾眠状態で、すこしでも放置しておくとも眠ってしまった。それでも名前を呼ぶと目を開けるし、身体を摩っていると表情が和らいだ。反応はあった。中野先生たちは数年に渡って彼に臨床動作法を施しているとのことだった（写真10）。そのたびに彼の身体の緊張は少しずつ弛緩した。一度は直立することもできたそうだ。しかし、先生たちがキャンプのために戻ってくると、彼の状態はやはり元のままだった。

現地スタッフは圧倒的に不足していたし、子どもに積極的なケアをすれば状態が改善することもあるということを知らなかった。子どもたちは十分な食事を与えられ、保護されていた。でも、生きていくため以上のケアは、全くなされていなかった。



写真 8



写真 9



写真10

5. まとめ

1) 国家としてのトラウマにどう関わっていけるか

トラウマとは“人間の心がある衝撃を受けてその心の働きが不可逆的な変化をこうむること”（岡野，2009）と定義されている。また、トラウマは個人的な体験だけでなく、国という一つの集合体でも起こりうる。例えば森ら（2005）はトラウマを精神医学的な視点にとどまらず、人文科学全体で再吟味している。

国家としてのトラウマに対し、私たちはどのように向き合っていけばいいのであろうか。

個人のトラウマ体験に対して、私たち援助者はどのようにアプローチしているかと考えてみる。例えば、一人の暴力的な被害を受けた被援助者を想定してみよう。その被援助者が援助を求めてきた場合は、まずは安全を提供する。どのような状況であるかを話せるようになればじっくりと話を聞き、その中で何かしら病的な症状が出現した場合は医学的なアプローチを採る。少しずつ生活する力が戻ってきた場合は現実的な支援をするし、時には公的なサービスを利用することを勧め金銭的な問題を解決に導くこともできる。そして最終的には、その被援助者が自立することを促す援助をしていく。

では国家に対しても、同じような支援はできないだろうか。確かに、個人と集団は違う。しかし、目指すべきところは同じではないだろうか。目指すべきところ、それはすなわち、自立

していくということである。

2) 臨床心理士としての関わり方——筆者の場合——

先に想定した暴力的な被害を受けたクライアントの場合、臨床心理士はどのような側面で関わるができるだろうか。筆者自身、さまざまな臨床場面で危機的な状況に直面しているクライアントに出会ってきた。その場合、筆者はまず生活と身体の安全を確保することを優先した。心理カウンセリングを行うときも、そのクライアント自身が内面に抱える問題を検討するより先に現状の危機を乗り越える力が発揮できるよう、サポートした。その後、改めて自分自身と向き合っていくサポートを行った。つまり、筆者にとって心理療法的なアプローチは支援の段階でも比較的后半に行うべきだと考えているということである。

カンボジアという国も、内外の争いの中で暴力にさらされ、多くのものを失い、傷ついた。そして多くの国や団体が、支援を行ってきた。ではカンボジアは現在、どのような支援を求めているだろう。カンボジアへの支援は、今どの段階に達しているだろうか。

これまで述べてきたカンボジア訪問の後、筆者は深い無力感に苛まれた。自分自身がなにかできるのではないかと期待していたが、なにひとつわからなかったのだ。その気持ちはずっと続いていた。しかし、本稿をまとめていくに従って、徐々にわかってきたように思う。

ある対象を支援していこうとした場合、まず援助者に求められることはアセスメントである。目の前の対象についてどんな問題があって、自分は何をできるかを見極めることである。筆者自身、その段階を無視していたのだ。それは先ほど述べたように、カンボジアの支援がどの段階に来ているかを見極めであり、カンボジアという国が何を求めているかを知ることでもある。それと同時に、筆者自身ができることとできないことを見極めていく作業でもある。

クライアントと心理臨床家が出会って心理カウンセリングを始める際の初回面接を、筆者は重視している。今、筆者はまさにカンボジアという国と出会ったばかりである。何が必要で、何を求めているか、それをじっくり時間をかけて聞いていこうと思う。カンボジアが最終的に自立できるように、筆者は何ができるかを自問しながら。

引用・参考文献及び資料

Constitution of Cambodia <http://www.constitution.org/cons/cambodia.htm>

森茂起 編 2005 埋葬と亡霊——トラウマ概念の再吟味（心の危機と臨床の知） 人文書院

岡野憲一郎 2009 新外傷性精神障害——トラウマ理論を越えて 岩崎学術出版社

駐日カンボジア大使館 http://www.cambodianembassy.jp/?option=com_content&view=article&id=74

Yale University 2005 Cambodian Genocide Program <http://www.yale.edu/cgp/>